聖　書：コリント人への手紙第一 15：12〜19
説教題：死者の復活がないとしたら
日　時：2023 年 1 月 29 日（朝拝）

聖書の中で復活について論じている代表的な箇所と言えば、このコリント人への手紙第一 15 章になるかと思います。全部で 58 節あり、そのすべてが復活のテーマの下で語られています。なぜパウロがここで復活の話を始めたかについては今日の最初の 12 節に示されています。「ところで、キリストは死者の中からよみがえられたと宣べ伝えられているのに、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はないと言う人たちがいるのですか。」　前回、コリント人たちに伝えられた福音について「最も大切なこと」が 4 つ確認されました。3〜5 節に記されましたが、それは私たちの罪のためのキリストの死、またその葬り、また三日目のよみがえり、そして復活の証人がいることです。コリント人たちはこの福音を受け入れ、パウロと同じ共通地盤に立っています。それなのにどうして「あなたがたの中に、死者の復活はないと言う人たちがいるのですか」とパウロは問います。パウロからすると、これは驚き以外の何物でもありません。キリストはよみがえられたと伝えられたのですから、当然死者の復活はあるという結論になるはずです。なのにあなたがたの中にそれがないと言う人たちがいる。「あなたがたの中に、そう言う人たちがいる」ということですから、それはコリント人全員ではなく一部の人たちではあったようです。しかしそれは無視できない状況であると判断されたため、パウロは 1 章を割いて取り上げているのでしょう。

一体なぜある人々はキリストの復活が含まれている福音を聞きながら、死者の復活はないと主張していたのでしょうか。色々な意見がありますが、おそらく最も妥当なのは当時のギリシャ思想の影響ゆえというものです。ギリシャ世界では人間を霊と肉に分けて考え、霊魂は清く、気高く、不滅性を有するのに対し、肉体はより劣る汚れた部分であり、やがては滅ぶものと考えられていました。霊魂と肉体の分離が起こるのは死の時です。その時、魂は肉体という牢獄から解放され、救われる。一方、魂を閉じ込めていた肉体は滅ぼされる。目に見えるからだは朽ち果てますが魂は永遠に残るという霊魂不滅説です。そういう思想を持つ社会の中から救われたコリント人のある者たちは、福音を聞いて受け入れたつもりであっても、肉体が復活するという話はとても考えられないことであり、そのため死者の復活はないと主張していたのだろうということです。これに加えてある人たちは、福音における復活のメッセージをただ

霊的に受け止めて、それはすでに起こったこととしてのみ考えていたということがあったかもしれません。テモテへの手紙第二 2 章 18 節には、ある人たちが「真理から外れてしまい、復活はすでに起こったと言って、ある人たちの信仰をくつがえして」いたと言われています。聖書の中に、たとえばコロサイ人への手紙 2 章 12 節にこうあります。「バプテスマにおいて、あなたがたはキリストとともに葬られ、また、キリストとともによみがえらされたのです。キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じたからです。」　ここにキリストの復活に基づいてあなたがたはキリストとともによみがえらされたと言われています。これは信者が新しいいのちに生かされていることを語ったものです。これが復活が意味するすべてであると受け取って、復活はすでに起こったと主張し、従って肉体の復活があるのではないという主張につながっていたことも考えられます。このような霊だけを尊び、肉体を軽蔑するいわゆる二元論からは誤った生活が出て来やすくなります。その一つは禁欲主義です。この手紙の 7 章 1 節にはコリント人たちが「男が女に触れないのは良いことだ」と主張し、それによって教会に混乱が生じていたことが述べられていました。肉体に関することは軽蔑し、見下して、それと関わらない人ほど霊的な人間であるとある人たちは考えたようです。これは霊とからだの両方をもって一つの人間として造られた神の御心から大きく外れるものです。また肉体は汚れた部分であって、救われる部分でないとする考え方は、放縦な生活、不道徳な生活へとも人を導きかねません。この手紙の 6 章後半にも、コリント人たちにそのような傾向があったことが記されていました。そこでパウロは死者の復活はないと主張する人たちがたとえ多くなかったとしても、早い内にこの問題を取り上げておかなければならないと考えたのだと思われます。

パウロは 13 節でまずこう言います。「もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかったでしょう。」　さてこれはどういう意味でしょうか。コリント人のある者たちは死者の復活はないと主張していました。もしそうであるならキリストのよみがえりは不要となる。それは起こらなかったことになるということです。3 節でキリストの死は私たちの罪のための死だと言われました。キリストの死はご自分のための死ではなく、私たちを救うための死でした。ですからキリストの復活もキリストご自身のためではなく、私たちのための出来事、私たちの復活のための出来事です。従って、もし私たちの復活がないということであれば、キリストの復活は必要ないということになり、神はそういう意味のないことはなさらなかったはずです。パウロはこうして「結果」の否定は「原因」の否定となるという論じ方をしています。死者の

復活、すなわちキリスト信者の復活の否定はキリストご自身の復活の否定に至ると。そしてもしキリストの復活はなかったということになると、私たちの信仰はどういうことになるかについて以後語るのです。

14 節以降は 2 つの部分に分けられると思います。前半は 14〜15 節で、後半は 16 節以降です。まず 14 節でパウロは「そして、キリストがよみがえらなかったとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しいものとなります」と言います。「空しい」という言葉は「空っぽ」とか「空虚」とか「中身がない」という意味の言葉です。パウロたちは 3〜5 節に述べられた福音を語って来ましたが、それは中身のないものだったということになります。またそれを聞いて信じたコリント人たちの信仰も空っぽのものということになります。特にここではパウロたちの宣教に焦点が当てられ、15 節で「私たちは神についての偽証人ということにさえなります」と言われます。仮に死者がよみがえらないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはずですが、それなのに私たちは神がキリストをよみがえらせたと伝えた。これは神がしていないことを、神はしたと偽って語ったことになり、神に逆らう証言をして来たことになります。中身のない空しいことを語っただけでなく、神に反逆して来たことにもなります。もちろんそんなことをパウロたちがして来たはずはありません。しかしキリストの復活を否定するなら、こんな恐ろしいことを意味するとパウロは言うのです。

16 節以降では、前半で述べたことをもう一度繰り返して話を始めます。16 節は 13 節と同じです。コリント教会のある人たちは死者のよみがえりはないと言っていましたが、その主張はキリストの復活の否定を意味するということをパウロはくどいほど繰り返します。そして 17 節で、「もしキリストがよみがえらなかったとしたら、あなたがたの信仰は空しい」と、14 節で触れたことをもう一度述べて、今回はこちらに焦点を当てて語り始めます。彼はここで新しく二つのことを言います。その一つは「あなたがたは今もなお自分の罪の中にいます。」　3 節で、キリストは私たちの罪のために死なれた、つまり私たちの罪を引き受けて死なれたと言われましたが、その方がもし復活しなかったなら、私たちの罪は赦されていないということになります。キリストは私たちの罪を背負おうとしたが十分に代価を支払うことができなかったため、死の力の下に置かれたままにされている。つまり私たちの罪はまだ清算されていない。私たちの罪は赦されていないということです。ローマ人への手紙 4 章 25 節 :「主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみ

がえられました。」　主の復活がなかったなら、私たちが義と認められることは起こっていないことになります。私たちは今もなお自分の罪の中にあるということになるのです。

もう一つは 18 節です。「そうだとしたら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったことになります。」　罪の赦しが実現していないのですから、先に死んだ信者たちは滅んだことになります。彼らは呪いの下、刑罰の下にあります。キリストの復活の否定は現在と将来の私たちについて恐ろしいことを意味するとパウロは言うのです。

最後の 19 節は結論です。「もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者です。」　ここは訳し方について議論のあるところで、特に「のみ」という言葉をどこにかけて訳すかが問題になります。原文では英語の Only に当たる言葉が 19 節前半の条件を述べている部分の最後に独立して置かれていますから、前半部分全体にかかるように訳すと良いと思われます。語順も意識すると次のようになるでしょうか。「もし私たちが、この地上のいのちにおいて、キリストに望みを抱いている、ただそれだけであるなら」。これは 17〜18 節から出て来る結論です。キリストが復活しなかったとすると、私たちの信仰は空しく、私たちは罪の中にいることになります。先に死んだ人も滅んでいます。つまり一言で言えば私たちに将来はないということです。コリント人たち、また私たちは、勝手に将来への望みを持つかもしれませんが、現実にはその将来はありません。滅びがあるだけです。地上で望みを抱いている、ただそれだけであって、地上の命を終えた後に、望んだものは一切ないのです。そうであるなら私たちはすべての人の中で一番哀れな者だとパウロは言います。確かにそうです。自分はキリストを信じて罪から救われたと思って歩んだけれども、それは真実ではなく、ただそう思い込んでいただけ。また将来に希望を抱いて歩んだところ、地上の生涯が終わってみて判明することは、そんな将来はなく、見込み違いであったということ。またクリスチャンはこの世で主に従って狭い道、苦難の道を行きます。十字架を背負ってキリストについて行きます。ところがその報いは何もない。もっと気楽に生きた方が良かったということになる。そういう意味で最も哀れな者であるということでしょう。

パウロはこうして死者の復活の否定はキリストの復活の否定を意味し、キリストの

復活の否定はさらに何を意味するかについて語って来ました。一言で言えば、それはキリスト教福音の全部を破壊するということです。反対から言えばキリストの復活はそれだけキリスト教信仰の根本的な事柄であるということでもあります。パウロが導きたいと思っていることは、コリント人たちが、またこの手紙を読む読者たちが、キリストの復活が持っている意味を、それが有する含意を、あるいはその含蓄を良く良く受け止めるということです。キリストの復活はただキリストが復活したという話にとどまるものではありません。それは私たちの信仰生活全般にとてつもない意味を持っています。そのことを私たちは良く考え、その福福に生きる者でなければならないということです。

今日の箇所は否定面からずっと語られて来ましたが、積極面から言うならばキリストの復活は何を意味するかについては次回以降語られます。今日は箇条書きのようにして以下の 3 つのことを覚えたいと思います。まず一つ目として今日の箇所の御言葉によれば（17 節）、キリストの復活は罪の赦しと一つに結び付いています。キリストの死者の中からのよみがえりは、私たちの罪の負債が完全に支払われたことを証明するものです。ですから復活のキリストに信頼する者は今や罪の中にないという者にされています。神の前に義と認められ、今日、神との生ける交わりに生かされています。これはキリストの復活が私たちにもたらしている祝福です。

二つ目はキリストが復活したので、私たちの将来の復活、からだの復活もあるということです。パウロはこの二つは一つのことであるということを今日の箇所で強調きました（13 節、16 節）。片方があって片方がないということはありません。これはワンセットです。ですからキリスト教の教えは単なる霊魂不滅説とは異なります。ある人は死を境にして、時間が経つごとに朽ちて行くからだを見て、これがまた復活するとは考えられないと思うかもしれません。ギリシャ的な思想の中で生きて来たコリント人たちとしても、この地上的なからだが天に入るとは到底思えなかったのでしょう。しかしパウロは後に、私たちはやがての日に天にふさわしい体、栄光の御国にふさわしいからだをいただくことになると述べます。そういう日が来ることをキリストの復活は保証しています。

そして三つ目はこの輝かしい将来の復活を見つめることによって私たちの地上の信仰生活は導かれて行くべきであるということです。私たちの歩みにはゴールがあり

ます。そのゴールに日々私たちは近づいています。その先にあるものをよく見つめることによって、今ここでの私たちの信仰生活は整えられて行くべきであるということです。キリストのからだを持った復活は、やがての私たちのからだを持った復活のためのものです。次回の 20 節で見る通り、キリストは初穂としてよみがえられました。初穂は将来の復活を保証するものです。このメッセージを受け止めて、前に置かれているものをいつも喜び見つめ、希望と期待に強められて、その日へと向かう地上における信仰の歩みを今週も導かれて行く者たちでありたいと思います。